

中学生の疎外感¹

Alienation of Junior-High-School Students

内藤 哲雄
Tetsuo Naito

青年期に至ると、児童期のように具体的状況に拘束されることなく、論理的・抽象的に思考することが可能となり、観念の世界が飛躍的に拡大する。このため行動の基準も、身辺的・現実的なものから観念的なものへと質的に転換し、理想や目標が現実の生活空間の中に組み込まれるようになる。また身体面においても、身長や体重の増加、性機能の成熟など、目覚しい成長がみられる。

こうした発達段階にある青年は、自身の身体に対する関心の高まりとともに、自己とは何か、いかように生きるべきか、などについて内省しはじめるようになる。この自我意識の萌芽が、さらに自己をとりまく世界や、その中で生活する人間への関心を惹起し、それらについて再認識させることになるのである。児童期までは、両親や教師をはじめとする大人や、学級とか近隣の友人、マスメディアなどを通じて教えられたものが単純に取り入れられていたのに対し、青年期では、既存の価値感や思想への反発や共感を通して、自身が納得できるものを探求するようになるのである。すなわち、青年期に至ると、自我意識の昂揚により、人生、社会現象、価値、思想への関心が喚起され、自分自身の人生観や世界観の模索が開始されることを意味する。

しかし青年期は、生理的にも、心理的にも、社会的にもいまだ過渡期にあり、社会からは大人でも子供でもないという扱いを受けがちで、不安定な周辺の立場に追いやられることになる(戸田, 1970)。従って、現実生活への拘泥を要することもなく、現状打破的傾向や、急進的傾向や、理想

主義的傾向をきわだたせることになるのである。こうした傾向は、具体的経験の不足による現実遊離や思考の抽象的特質のゆえに、一層助長されることになる。このため現実の生活に適用しようとすると、多くの矛盾を露呈することになるのである。また、青年の人生観や世界観は、一貫した思想的体系としては構築されてはおらず、日常的な生活体験を繰り返すなかで形成されかつ変容されていくことから、生活感情(気分)としての特質をもつといえよう(返田, 1970)。

上述してきたように、青年は自我の確立を企図しながらも、自我意識は、次々と直面する新たな日常体験によって揺動しやすい不安定な状態にあるといえよう。別言すれば、自我同一性(identity)の危機に直面する時期であり(Erikson, 1959)、青年を取り囲む他者からの疎外(alienation)、青年自身からの疎外(自己疎外: self-alienation)の発生しやすいときであるといえよう(野辺地, 1972)。

なかでも青年前期にあたる中学生期は、自我の萌芽段階であることから、とりわけ疎外状況に陥りやすいことは自明であろう。そして、先に触れたように、中学生にとっては論理的思考能力も不十分であり、日常体験によって左右されがちな人生観や世界観は、主義とか思想と称するにはほど遠く、人生感や世界感とよぶべきレベルにあるということになる。同様のことが、これらと関連する疎外についてもいえ、疎外を生じる状況についての体系的な理解に至るということではなく、生活感情としての疎外感(feeling of alienation)

1 本研究の調査Ⅱは、浦和市立教育研究所遠藤徹氏の多大なる援助により実施されたものである。記して謝意を表するものである。

として感受されるといえよう。しかしながら、疎外についての感情にすぎないとはいっても、中学生の生活上の具体的な悩み（例えば、内藤・遠藤、1978）の背後にあって、自我意識と緊密な関連をもつものと考えられ、中学生の心理構造をあきらかにするためには不可欠な研究テーマであるといえよう。そして、疎外感が、性や年齢（例えば、間宮、1979）とか、家族関係（例えば、依田、1978）や、交友関係（例えば、内藤、1986）などと、どのように関連しているかについて検討していかねばならないであろう。

ところで、疎外の問題に関して、個人における疎外感の観点から着目し、社会心理学的な概念として最初に採りあげたのは、アメリカのSeeman（1959）である（日高、1962）。Seemanは、疎外感の構成因として、無力性（powerlessness）、無意味性（meaninglessness）、無規範性（normlessness）、孤立（isolation）、自己疎隔性（self-estrangement）の5つをあげている。これを受けたDean（1961）は、上述の5つについて検討し、無力性、無規範性、社会的孤立（social isolation）の3つが主要構成因であるとして、これらの強度をはかる尺度を考案し、職業、教育程度、収入、年齢などとの関係について調査している。

以上のような背景のもとに、本研究では、まずDeanの疎外尺度（alienation scale）を日本の中学生用に翻案し、調査Ⅰでは、因子分析により中学生の疎外感の構成因をあきらかにするとともに、性や学年による差異を検討することが目的とされた。ついで調査Ⅱにおいては、家族構成や友人の数と疎外感との関係を検討することが目的とされたのである。

調 査 Ⅰ

目 的

中学生用の疎外尺度を作成し、調査データに基づき因子構造をあきらかにする。ついで、それぞれの構成因子ごとに、性差と学年差について検討することが目的とされた。

方 法

<調査対象>

中学生 293 名のうち、データに欠損箇所のある13名を除いた280名（1年、男子35名、女子32名：2年、男子71名、女子46名：3年、男子59名、女子37名）を、分析の対象とした。

<調査内容>

Deanの疎外尺度24項目（邦訳は、内藤・今井、1975参照）を基に、中学生用の30項目を作成した（質問項目の内容は、表1を参照）。各尺度への回答は、「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」、「どちらともいえない」、「どちらかといえばそうは思わない」、「そうは思わない」、の5段階であった。

<手 続>

学年、性別、氏名の回答欄と、疎外尺度から構成された調査票に、集団事態で回答させた。ついで、疎外尺度の構造を因子分析により検討した。さらに、それぞれの因子に負荷の高い項目への回答を基に、各因子の尺度得点を算出し、性差・学年差を検討した。

結果と考察

<因子分析>

因子分析は、主因子法により固有値1.0000以上を基準としたところ、5因子抽出された。回転後の因子負荷量は、表1に示されている。負荷量の高い項目に基づいて各因子の解釈をこころみたところ、次のようになった。

第Ⅰ因子 — この因子で負荷の高い項目は、将来、生き方、人生の価値に対する不確定感や迷い（項目番号6, 27, 5）、また自己の無力感（項目番号20, 12）などである。全体に自信がなく無力であることを表現するものと考えられ、「自信の欠如」の因子であると解釈することができよう。

第Ⅱ因子 — 負荷量が.4000以上のものをみると、友情への信頼に関する項目（項目番号19, 15）がプラスの負荷で、目的さえよければとか、罪にとわれなければ、悪いことをしてもよいとする項目（項目番号30, 17）がマイナスの負荷となっている。プラスとマイナスのいずれの方向に命名してもよいのであるが、疎外感についての因子分析であるので、マイナスの方向で命名したい。そうすると、他人を信用せず、自己の目的や利得のた

表1 疎外尺度についての回転後の因子負荷量

項目 番号	質問項目	因子負荷量					共通性
		I	II	III	IV	V	
6	将来のことを考えると気がめいってしまう。	.5442	.1419	-.1244	.2293	.3401	.5000
27	あまりに多くの生き方があるので、どのように生きればよいかわからない。	.5074	.0664	-.1808	.0599	.1509	.3209
20	私は、たよりにならない人間である。	.4921	-.1300	.1508	.1171	.0031	.2955
12	今の世の中で、自分にできることはほとんどない。	.4568	-.1289	-.1014	.1858	.1142	.2831
13	責任を持たされると、不安な気持ちになる。	.4459	-.0484	.0674	.0128	.0852	.2131
5	人生の意味がほんとうにあるかどうか迷うことが多い。	.4210	.1274	.0562	.0643	.2141	.2466
24	試験の前になると、失敗するのではないかと不安になる。	.3768	.1074	-.1074	-.0490	.2084	.2109
21	毎日しなければならぬことが多くて、いらいらする。	.3630	-.1490	-.1930	.2724	.0813	.2720
22	何か完成するためには、多少のギセイはつきものである。	.2785	-.0260	.0067	.0840	-.0370	.0867
19	人は本当のところ友情あつく、助けあうものである。	.0200	.5453	.0724	.0472	-.0765	.3111
15	私たちの住んでいる社会は、結局は友情からなっている。	.0870	.4812	-.1343	-.0904	-.0607	.2690
30	目的さえよければ、多少の悪いことはゆるされる。	.1727	-.4391	-.0787	.1570	-.0750	.2591
17	罪にとわれなければ、何をしてもよい。	-.0325	-.4339	-.2088	.3496	.0655	.3594
25	世の中にはいろんな考えがあり、人の生き方は決まっていらない。	-.0066	.3877	.1993	.0930	-.0529	.2015
1	ほんとうの友をみつめるのはやさしい。	.0578	-.1478	-.5537	-.0204	-.1389	.3515
23	運がよくなければ、いい成績はほとんどとれない。	.2712	-.2756	-.5442	.0481	.0860	.4554
9	自分の得になるから、人と人はつながりをもつのである。	.1596	-.0497	-.4672	.1207	.1242	.2762
26	すなおであればいつでも友をみつめることができる。	-.1289	.2561	-.3669	-.0033	-.1239	.2322
3	さびしいと思う人はほとんどいない。	-.0728	-.0223	-.3291	.0532	-.0674	.1215
14	努力したってムダだと思うことがよくある。	.2904	-.2478	-.3282	.2226	.1863	.3377
28	人の考え方はしばしば変わるので、あまりあてにできない。	.1971	-.0087	-.0785	.4872	.0330	.2835
11	なかのよい人でも腹の中はわからない。	.1160	-.0205	.0642	.4468	.3103	.3139
2	今の世の中に、たよりになるものは何もない。	.0981	-.1307	.0049	.4405	.2206	.2694
16	今の世の中では何もかも決められており、自分のことですら選べることは少ない。	.3664	-.0541	-.0929	.4034	.0098	.3086
8	私たちの人生は、機械の歯車にすぎない。	.3458	.0640	-.2274	.3984	.1228	.3492
18	私は、たいいていのことには、なやまされない。	-.2009	.0623	-.2357	.2550	-.1837	.1986
10	自分はのけものにされていると思うことがある。	.0984	-.0784	.0799	.1607	.6799	.5103
4	ときどきだれかに利用されているような気がする。	.0615	-.0269	-.1145	.1277	.5677	.3562
7	ときどきひとりぼっちのような気がする。	.1784	-.0759	.1730	-.0416	.5662	.3898
29	友達は、自分が思うほどには、いっしょに遊んでくれない。	.2429	-.1236	.0598	.2102	.4173	.2962
累積寄与率 (%)		8.1	13.0	18.3	23.4	29.6	

ゴシック体の因子負荷量は、.4000以上の負荷を示すもの

めに多少の悪いことも許されるという内容となる。従って、「利己的傾向」の因子であると解釈することができよう。

第Ⅲ因子 — ほんとうの友人はみつけやすく、人とつながりをもつことは得になる(項目番号1, 9)し、成績は運による(項目番号23)とする質問内容に負荷が高い。これらにつぐ項目26の、“すなおであればいつでも友をみつけられる”を参考にするならば、素直さと運があれば、自分に益する所の多い人間関係や学業成績の向上はなんとかなると感じる傾向を示す因子であるといえよう。そこで、「甘えの傾向」と名付けることができよう。

第Ⅳ因子 — 負荷の高い項目は、人の考えはしばしば変わるし、仲の良い人でも何を考えているかわからないし、今の世の中では頼りになるものがなく、何もかも決められており自分のことですら選ぶ余地がない、と感じる傾向を示すものである(項目番号28, 11, 2, 16)。人間関係や生活において基準となるべきものを持ってないということであり、「無規範感」の因子であると解釈することができよう。

第Ⅴ因子 — この因子に該当する項目は、全て負荷が高く、他人からのけものにされたり、利用されているとか、ひとりぼっちで、友人にもあまり遊んでももらえないと感じるのであるから、「社会的孤立」の因子であるといえよう。

以上のように、中学生の疎外感は、「自信の欠如」、「利己的傾向」、「甘えの傾向」、「無規範感」、「社会的孤立」、の5つの因子から構成されている

表2 第Ⅰ因子(自信の欠如)の性・学年についてのM・S D

学年	男 子		女 子	
	M	(SD)	M	(SD)
1	11.80	(4.35)	10.66	(4.99)
2	11.15	(4.40)	11.76	(4.53)
3	11.02	(5.42)	9.41	(4.44)

表3 第Ⅰ因子(自信の欠如)の性・学年についての分散分析表

変 動 因	SS	df	MS	F
性	32.806	1	32.806	1.44
学 年	75.028	2	37.514	1.65
交互作用	58.823	2	29.412	1.29
誤 差	6240.223	274	22.775	

表4 第Ⅱ因子(利己的傾向)の性・学年についてのM・S D

学年	男 子		女 子	
	M	(SD)	M	(SD)
1	3.23	(2.81)	3.88	(3.36)
2	4.41	(3.06)	3.43	(2.09)
3	4.53	(2.76)	4.24	(2.65)

表5 第Ⅱ因子(利己的傾向)の性・学年についての分散分析表

変 動 因	SS	df	MS	F
性	2.754	1	2.754	.34
学 年	29.753	2	14.877	1.84
交互作用	28.771	2	14.386	1.78
誤 差	2212.650	274	8.075	

表6 第Ⅲ因子(甘えの傾向)の性・学年についてのM・S D

学年	男 子		女 子	
	M	(SD)	M	(SD)
1	3.83	(2.72)	3.16	(2.68)
2	3.83	(2.70)	2.11	(1.87)
3	4.14	(3.18)	2.68	(2.54)

表7 第Ⅲ因子(甘えの傾向)の性・学年についての分散分析表

変 動 因	SS	df	MS	F
性	106.178	1	106.178	14.53***
学 年	13.652	2	6.826	.93
交互作用	12.853	2	6.427	.88
誤 差	2002.569	274	7.309	

*** P<.001

表8 第IV因子(無規範感)の性・学年についてのM・SD

学年	男 子		女 子	
	M	(SD)	M	(SD)
1	7.91	(2.85)	6.97	(3.25)
2	8.41	(3.30)	7.70	(3.51)
3	7.83	(3.97)	6.76	(3.06)

表9 第IV因子(無規範感)の性・学年についての分散分析表

変 動 因	SS	df	MS	F
性	52.997	1	52.997	4.48*
学 年	27.990	2	13.995	1.18
交互作用	1.429	2	.715	.06
誤 差	3238.548	274	11.820	

* P < .05

ことがあきらかとなった。既述のように、Deanの疎外尺度の構成因は、「無力性」、「無規範性」、「社会的孤立」である。これらに対しては、「自信の欠如」、「無規範感」、「社会的孤立」がそれぞれ対応すると考えられる。

ところが本調査においては、さらに「利己的傾向」と「甘えの傾向」の2因子が抽出されているのである。Deanの調査は成人を対象としており、本研究では中学生を対象としていることから、「利己的傾向」の因子がみられたのは、青年期特有の理想主義的傾向から生じた、社会や大人への批判と反動によると考えられる。しかしそれだけではなく、日本の青年は諸外国の青年に比べ、人間の本性は本来悪であるとする「性悪説」に賛成する者が多いという松原(1974)の報告とも、関連するものと思われる。また「甘えの傾向」についても、青年前期の自我の未熟さを示すものと解釈できるが、それよりも土居(1971)の指摘した日本青年特有の心性である「甘え」が背景となっていると推論できよう。

<性差・学年差>

因子分析により、4000以上の負荷量をもつ項目を、それぞれの下位尺度の項目とした。各個人の得点は、「そう思う」から「そうは思わない」までに、それぞれ4～0点を与え、尺度ごとに合計点を算出した。ただし、第II因子の「利己的傾向」

に関しては、項目番号19と15を逆転項目とした(これらの項目においては、「そう思う」から「そうは思わない」に対し、それぞれ0～4点を与えた)。性別、学年別に平均点(M)と標準偏差(SD)を算出した結果と分散分析の結果は、表2から表11に示されている。以下、各因子ごとに検討していきたい。

表10 第V因子(社会的孤立)の性・学年についてのM・SD

学年	男 子		女 子	
	M	(SD)	M	(SD)
1	7.00	(4.24)	8.56	(3.88)
2	7.35	(3.39)	7.13	(4.11)
3	5.98	(3.63)	7.54	(3.65)

表11 第V因子(社会的孤立)の性・学年についての分散分析表

変 動 因	SS	df	MS	F
性	60.244	1	60.244	4.15*
学 年	44.768	2	22.384	1.54
交互作用	45.393	2	22.697	1.56
誤 差	3974.302	274	14.505	

* P < .05

第I因子(自信の欠如) — 因子負荷量が.4000以上のものは6項目であり、得点の分布可能範囲は0～24点となり、中央は12点となる。表2の各群の平均値はいずれも12点をやや下回る程度であり、自信の欠如は強いとも弱いともいえない範囲にあるといえよう。表3の分散分析表にみられるように、性差・学年差とも有意ではなかった。

第II因子(利己的傾向) — 4項目が該当し、中央は8点となり、0～16点の範囲で分布可能である。どの群の平均値も、どちらかといえば利己的でないことを示している(表4参照)。表5の分散分析の結果は、性差も学年差もみられないことを示している。

第III因子(甘えの傾向) — この尺度には3項目が該当し、中央6点、分布は0～12点となる。表6にあきらかなように、いずれの群もどちらかといえば甘えの傾向が少い。分散分析の結果、性差のみが0.1%水準で有意となった(表7参照)。そこでさらに学年ごとに性差を検討したところ、1

年生では差がないが、2年と3年で女子の方が有意に低い値となった(2年, $t = 3.739$, $df = 115$, $P < .001$; 3年, $t = 2.317$, $df = 94$, $P < .05$)。この結果は、中学生の悩みに関する遠藤・内藤(1978)の研究で、中学2年の時期に、女子は将来への展望がもてなくなり、親に対して、自分の気持ちや考え方、能力を理解し、自主性を尊重してほしいと感じる結果が得られたのと、対応しているといえよう。こうした結果には、小倉(1982)の示唆するように、男女の性役割観の発達が関与していると思われる。

津留・西平(1968)は、女子の場合には青年期が主として結婚の準備期として考えられるのに対し、男子においては自分の生涯の課題の方向と内容を決める全生活的なものである、と述べている。そこで女子では男子のようにいかに自立するかという課題を中心に展開されず、むしろ個人的・内面的な変化として体験される。このため男子のように、子供っぽい自己主張の欲求をもたず、関心はもっと生活的・実線的であるというのである。こうした性役割の意識化が、女子の2年以降の甘えの傾向の低下を招来したと考えられよう。

第IV因子(無規範感) — 該当するのは4項目であり、中央8点で、分布可能範囲は0~16点である。表8に示されているように、各群とも、無規範感は強いとも弱いともいえない範囲にある。表9の分散分析の結果は、性差のみが有意であり、男子の方が高いことを示している。さらに各学年ごとに検討したところ、単独ではどの学年においても差がみられなかった。

Dowling(1981)は、現代社会における女性役割から生じるものとして、シンデレラ・コンプレックスとよぶべき「依存的願望」があることを主張している。この依存的傾向は、一見すると、自身のたよりなさや生きるための規範の不明確さを感じさせやすいように思われる。ところが実際には、間宮(1979)の指摘するように、女子の依存性や同調性の高さは、環境に適応し、規則を遵守する傾向を強めるのである。こうした女性的特徴や性役割の意識化が、男子よりも無規範感が低いという結果を生じたのであろう。

第V因子(社会的孤立) — この因子に.4000以上の負荷をもつのは4項目であり、中央8点で、

分布は0~16点となる。表10から、社会的孤立は、どの群も強いとも弱いともいえない中程度であるといえよう。分散分析の結果は、表11にみられるように性差だけが有意であり、女子の方が社会的孤立の傾向が強いことを示している。さらに分析したところ、3年生のみに差がみられた($t = -2.025$, $df = 94$, $P < .05$)。

既述のように、女子の方が依存的傾向の強いことが知られている。こうした点は、親密な対人関係の指標となる自己開放性(self-disclosure)において、女性の方が高い(加藤, 1977)ことから支持されよう。これらはいずれも、女子青年の方が他者依存的でより親密な関係を欲していることを示すものである。これが、女子に社会的孤立感を生じさせやすい背景となっていると思われる。そして、進学や就職のための受験を控え、対人関係が希薄となりやすい3年生期において、顕著な差を生じたと考えられよう。

調 査 II

目 的

調査Iにおいて、疎外感を構成する因子をあきらかにし、各因子ごとに性差・学年差を検討してきたが、ここでは、家族構成や友人数との関係を検討することが目的とされた。

方 法

調査Iの性差・学年差の検討に用いられた、第I因子(自信の欠如)6項目、第II因子(利己的傾向)4項目、第III因子(甘えの傾向)3項目、第IV因子(無規範感)4項目、第V因子(社会的孤立)4項目、の合計21項目からなる疎外尺度に、以下の項目が追加された。それらは、祖父母との同居・非同居、両親共働きの有無、きょうだい数、出生順位、同性のきょうだいの有無、友人の数、に関する6項目であった。

以上の尺度と項目からなる調査票に、中学生男女129名を対象として、集団事態で回答させた。そのうちデータに欠損のある30名を除いた、99名が分析された(ただし、両親の共働きについては94名、友人の数については91名であった)。

表12 家族構成および友人数と疎外感についてのM・SDおよびt

因子		祖父母同居		祖父母非同居		両親の共働き		きょうだい数		出生順位		同性のきょうだい		友人の数	
		(N=22)	(N=77)	(N=42)	(N=52)	(N=10)	(N=89)	(N=56)	(N=43)	(N=53)	(N=46)	(N=45)	(N=46)		
I (自信の欠如)	M	10.59	10.03	10.21	10.10	6.50	10.55	9.68	10.74	11.64	9.15	9.84	10.89		
	(SD)	(3.70)	(4.94)	(5.05)	(4.52)	(2.80)	(4.67)	(4.59)	(4.73)	(4.61)	(4.56)	(4.48)	(4.78)		
	t	0.489		0.110		-2.664**		-1.112		2.039*		-1.068			
II (利己的傾向)	M	4.18	3.66	3.52	4.08	2.90	3.88	3.73	3.84	3.92	3.61	3.84	3.59		
	(SD)	(1.61)	(2.45)	(2.26)	(2.30)	(2.21)	(2.29)	(2.44)	(2.10)	(2.23)	(2.36)	(2.45)	(2.17)		
	t	0.933		-1.201		-1.276		-0.055		0.670		0.510			
III (甘えの傾向)	M	5.45	5.68	5.71	5.63	4.80	5.73	5.43	5.91	5.75	5.50	5.76	5.52		
	(SD)	(1.97)	(2.33)	(2.10)	(2.40)	(1.60)	(2.30)	(2.00)	(2.52)	(2.40)	(2.06)	(2.11)	(2.35)		
	t	-0.419		0.168		-1.234		-1.047		0.550		0.506			
IV (無規範感)	M	5.55	7.17	7.14	7.35	6.90	7.28	7.16	7.19	7.17	7.33	7.44	7.06		
	(SD)	(2.69)	(3.47)	(3.43)	(3.20)	(4.04)	(3.23)	(3.19)	(3.62)	(3.04)	(3.61)	(3.57)	(3.19)		
	t	-2.010*		-0.303		-0.340		-0.043		-0.239		0.687			
V (社会的孤立)	M	7.36	6.88	6.79	6.96	5.80	7.12	6.54	7.58	7.36	6.57	7.62	6.70		
	(SD)	(3.80)	(3.69)	(3.84)	(3.67)	(4.53)	(3.59)	(3.77)	(3.57)	(3.92)	(3.42)	(3.58)	(3.82)		
	t	0.531		-0.216		-1.061		-1.380		1.058		1.171			

* P<.05 ** P<.01

結果と考察

家族構成や友人数に関する6変数について、それぞれ2群に分け、各因子ごとに平均値(M)と標準偏差(SD)およびtの値を求めた結果が、表12に示されている。疎外感の強さを下位尺度別にみると、調査Iの結果に比べて甘えの傾向については各平均がいくぶん高いが、全体としてはほぼ同程度であるといえよう。そこで、以下各変数ごとに疎外感との関係を検討する。

祖父母との同居 — 祖父母と同居か非同居かと疎外感の関係をみると、下位尺度ごとに高低の位置が異なり、一貫した傾向がみられない。t検定の結果は、第IV因子の無規範感のみで有意差があり、祖父母と同居の方が無規範感が低いことを示している。

野辺地は、第二次世界大戦後わが国で多くみられるようになった、二世代のいわゆる核家族においては、家族メンバーの心理的結合や連帯が弱体化、希薄化しており、家族の個々人とくに新旧世代間の葛藤が生じやすいと述べている。この見解に従うならば、二世代からなる核家族の方が、旧世代から青年への価値や規範の伝達が困難であるといえよう。このため、祖父母と同居の方が無規範感が低いという結果を生じたと解釈することが

できよう。

両親の共働き — この変数についても一貫した傾向はみられなかった。有意差もないことから、両親の共働きの有無が疎外感に影響しないといえよう。意外に思われるこの結果は、青年の自我意識の高まりから心理的な離れである親離れがはじまる(加藤, 1981)ことの反映であるとも読みとれよう。

きょうだい数 — ひとりっ子(きょうだい1人)ときょうだいあり(きょうだい2~6人)を比べると、いずれの下位尺度においても、きょうだいありの方が平均値が高い。t検定の結果は、第I因子の自信の欠如だけが有意であることを示している。

安香(1980)の述べているように、中学生になると親の介在という緩衝物がなくなり、直接きょうだい間で衝突するようになる。しかも他人同志のように無関心ではいられない。こうしたきょうだい同志の深刻な対立が、疎外感を感じさせやすく、その中でもとくに自信の欠如や無力感を抱かせやすいものと思われる。しかし安香は、家庭内にさまざまな考え方をする者が大勢いる方が、深い精神内容をもった個性を豊かに開化させやすく、健全な社会性の形成に有益であるという点につい

でも触れている。従って、疎外感を抱くこと自体については、単純には良否の判断を下せないということになる。原因と自我の成長への寄与に関する、総合的な評価を俟たねばならないといえよう。

出生順位 — 長子と非長子における平均値は、一貫して非長子の方が疎外感が高いことを示しているが、いずれの下位尺度においても有意差はみられなかった。齊藤（1975）は、長子の特徴として信念をもちやすく我ままになりやすいことをあげており、こうした長子に直面する非長子の方にいくぶんか強く疎外感を感じさせることになるのであろう。

同性のきょうだい — 同性のきょうだいの有無での平均値は、第Ⅳ因子の無規範感では無の方が高いが、他の因子ではいずれも有の方が高い。しかし有意差がみられたのは、きょうだい数の変数と同じく、第Ⅰ因子の自信の欠如だけである。性役割観が同じである同性のきょうだいのいる場合には、競争意識を抱きやすく、対立しやすいであろう。このことが疎外を感じさせやすく、とくに自信の欠如を感じさせることになったと思われる。

友人の数 — 友人数の多寡と疎外感の関係については、一貫した傾向がみられず、有意差もなかった。内藤（1986）の交友関係の記述にみられるように、中学生期は多人数からなるクラウドとよばれる集団と、きわめて少人数の親密な関係からなる親友の両方が形成される時期である。つまり友人関係については、人数の要因だけでなく、密度の要因が関係するといえよう。このため友人数の多寡が疎外感に有意な差をもたらさなかった、と解釈することができよう。

要 約

本研究では、自我意識の発達の著しい青年前期である中学生の疎外感について、因子構造をあきらかにするとともに、性や学年、家族構成や友人数との関係を検討することが目的であった。

分析の結果、疎外感の構造は、「自信の欠如」、「利己的傾向」、「甘えの傾向」、「無規範感」、「社会的孤立」の5因子からなることがあきらかにされた。これらのうち「利己的傾向」と「甘えの傾向」については、自我の未熟な中学生期の特徴と

してだけでなく、日本の社会文化的背景の影響が示唆されるものであった。また性差・学年差に関しては、性差のみについて、「甘えの傾向」、「無規範感」、「社会的孤立」で有意差がみられた。これらの結果に対して、第二次性徴を契機とする性役割観の観点から考察が加えられた。さらに家族構成や友人数について検討した結果からは、家族構成との有意な関係があきらかとなった。それらのうちでもとくに、きょうだい関係との関連の強さが指摘された。また、自我の成長に、疎外感が寄与する可能性についても示唆された。

引 用 文 献

- 安香 宏 1980 親離れのはじまり：親子関係と家庭教育 詫摩武俊・安香 宏（編）中学生の心理 第8章 有斐閣 P 165-188.
- Dean, D. 1961 Alienation: its meaning and measurement. *American Sociological Review*, 26, 753-758.
- 土居健郎 1971 「甘え」の構造 弘文堂
- Dowling, C. 1981 The Cinderella complex: women's hidden fear of independence. 柳瀬尚紀（訳）1985 シンデレラ・コンプレックス 三笠書房
- 遠藤 徹・内藤哲雄 1978 中学生の悩み(Ⅱ) 日本心理学会第42回大会発表論文集, 1064-1065.
- Erikson, E.H. 1959 Identity and the life cycle. 小此木啓吾（訳編）1973 自我同一性 誠信書房
- 日高六郎 1962 現代における自己疎外 思想, 10, 1274-1280.
- 加藤隆勝 1977 青年期における自己意識の構造 日本心理学会 心理学モノグラフ No.14.
- 加藤隆勝 1981 親子関係の変化 詫摩武俊（編）思春期の悩み 第2章 福村出版 P 34-58.
- 間宮 武 1979 性差心理学 金子書房
- 松原治郎 1974 日本青年の意識構造 弘文堂
- 内藤哲雄 1986 対人関係の発生と発達 対人行動学研究会（編）対人行動の心理学 第1

- 章 誠信書房 P 3-19.
- 内藤哲雄・今井保次 1975 疎外感の心理学的研究 日本応用心理学会第42回大会発表論文集, 117-118.
- 内藤哲雄・遠藤 徹 1978 中学生の悩み(I) 日本教育心理学会第20回総会発表論文集, 412-413.
- 野辺地正之 1972 現代青年における自己疎外 藤原喜悦(編) 現代青年心理学講座7 現代青年の生きがい 第1章 金子書房 P 1-54.
- 小倉千加子 1982 性役割行動の発達 東清和・小倉千加子 性差の発達心理 第Ⅲ章 大日本図書 P 155-214.
- 齊藤茂太 1975 兄弟関係 青春出版社
- Seeman, M. 1959 On the meaning of alienation, American Sociological Review, 23, 783-791.
- 返田 健 1970 青年の世界観, 人生観 藤原喜悦(編) 現代青年の意識と行動3 生きがいの創造 第6章 大日本図書 P 219-271.
- 戸田 晋 1970 青年のモラル 藤原喜悦(編) 現代青年の意識と行動3 生きがいの創造 第4章 大日本図書 P 119-155.
- 津留 宏・西平直喜 1968 現代青年の悩み 大日本図書
- 依田 明 1978 家族関係の心理 有斐閣